国語

次の文章を読んで、以下の各問に答えなさい。

ルネサンス期にゴシックという言葉が新しい意味を獲得する。それ以前は「ゴート人の」という意味の形容詞に過ぎなかったが、ゴート人のステレオタイプ化されたイメージから、「野蛮な」という一般的な意味が生じたのである。

きっかけは北方建築をめぐるヴァザーリの文章だった。彼は北ヨーロッパの建築を論じた箇所で、それらは「ゴート人によって発明された様式で」、「およそ秩序というものを欠いた、A シュウ怪で野蛮な」様式であると B 辛辣に述べた。だが、ヴァザーリが「ゴート人」というとき、それは厳密な意味でのゴート人をさしているのではなく、ゲルマン系民族全般をさしていた。そのため人々は、中世後期に北ヨーロッパを中心に流行した教会建築の様式をまるごと、C 皮肉をこめて「ゴシック様式」と呼び習わすようになる。

これがそもそもの [D] だった。「ゴシック」というのは本来ならば、「ゴート人の手による」とか「ゴート人が作った」という意味でなければおかしい。しかし、ヴァザーリは「ゴート人」イコール「ゲルマン系民族」という風に勝手に拡大解釈していたので、「ゴシック」という言葉も、「ゲルマン系民族」という意味で――しかもヴァザーリは北方民族が嫌いだったので、軽蔑のニュアンスをこめて――使われるようになってしまった。そして、古代の一民族の名称が一人歩きをはじめて、「野蛮な」という一般的な意味へと転じてしまった。ゴシック建築はゴート人が作ったものではないし、ゴート人が野蛮だというのも多分にヴァザーリの偏見が入っているので、E 迷惑といえば迷惑な話だ。

代表的なゴシック建築とは何だろう。それは、フランスのパリやシャルトル、アミアンのノートルダム大聖堂であり、ドイツのケルン大聖堂であり、イギリスのカンタベリー大聖堂やソールズベリー大聖堂である。その特徴は、[F－1] な装飾、[F－2] で巨大な室内空間、そして天を突く鋭い槍のような外観だ。ゴシックの大聖堂が建造された中世の時代、人々が思い描く世界――あるいは宇宙――のすがたは、現代人の思い描くものとはかなり異なっていた。それは、大地を底辺としてプラネタリウムの丸屋根のような空が世界を覆い、その果てには神のいる天国がある、そのような構造をしていた。

ゴシック聖堂の入口の前にいると想像しよう。まず、正面入り口の周囲を覆うようにさまざまな装飾が見える。左右を見ると、雨樋の先には怪物の彫刻がほどこされ、縦長の窓の上方には幾何学的な模様がデザインされている。聖堂のなかに入ると、身廊の先にある祭壇のおかれた内陣、それから美しく光るステンドグラスとバラ窓(1) がまず目に入る。しかしやがて視線は木々のように左右に立ち並ぶ列柱に導かれて上昇し、弧を描いて美しく交差するヴォールト天井へと自然に落ち着く。

この建築に私たちはどのような精神を読み取ることができるだろうか。ゴシックの大聖堂はカトリック信仰の G たまものである。カトリックは、プロテスタント登場以前には西ヨーロッパ全体を席巻したキリスト教の伝統的な教派だ。プロテスタントが信仰の中心点として信者ひとりひとりの心を強調したのと異なり、カトリックにおける信仰の中心は教会にある。教会という空間に集まり、聖職者を通じて神の言葉に触れることが信仰のもっとも大事な要素だった。だから、カトリック信仰において教会という場所は H ひときわ重要な意味をもつ。

大聖堂の、凝りに凝った、過剰な装飾の背後に、19 世紀イギリスを代表する批評家ジョン・ラスキンは J 作り手の「謙虚さ」を見た。それは「理想とした完成度に達するまで作品を充実させることはできない」という諦念からくる過剰さであり、「祭壇の前に不毛な労働を捧げる方をよしとする自己犠牲」の精神が生み出した過剰さである。一方、無限の奥行きをもつ室内空間と天高くそびえた尖塔は、天つまり神の領域への憧れがそのままかたちになったものにほかならない。仏文学者の酒井健はその [K] を「人間の力を超えたカリスマ的な力への強い憧憬と、この超人間的な力によって救われたいとする切羽詰まった願望」と表現する。ゴシック建築の形態は、ひとことでいうなら、敬虔なカトリック信仰の精神性を L 体現している。

小泉八雲は「ゴシックの恐怖」と題する短いエッセイで、幼少時、ゴシックの教会を前にしておぼえた恐怖感を回想している。彼はゴシック建築の尖った部分が怖かった、という。だが、その屹立する姿が「霊的なものへの憧憬」を表しているとするなら、どうしてそれが同時に「恐怖心」を、「不安」を呼び起こすのか、と彼は自問自答する。それから、ゴシックの塔を見上げたときの恐怖が、アメリカで椰子の木を見上げたときの恐怖と酷似していることを思い出す。両者にはどのような共通点があるのか。八雲はこう分析する。

> ゴシックアーチのもつすさまじい印象は、まさしくそれが力強いエネルギーを暗示していることからきている。短く伸びた二本の椰子が交差して描くアーチは、生長しようとする力をかすかに暗示する程度だが、ゴシック建築の高い中世的なアーチの線となると、あたかも自然をはるかにしのぐ強力なパワーを表しているかのようだ。ゴシック建築がもたらす恐怖心は、単に生長する生命を予感させるからだけではなく、自然を超えた、とてつもないエネルギーを連想させるからなのだ。

空高くのびてゆく塔の姿には、神という無限なるもの――非人間的なもの――への憧れがこめられている。それが恐怖を同時に感じさせるのは、単純に、その憧れの先にあるものが人間的なものではないからだ。

小泉八雲のこの経験は、のちに M 宗教学者ルドルフ・オットーが『聖なるもの』で「ヌミノーゼ」と呼んだものの体験にほかならない。オットー自身、典型的なヌミノーゼの対象としてゴシック建築をあげ、「私たち西欧の人間にとって最もヌミノーゼな芸術と映るのは、まず何よりもその崇高さゆえに、ゴチック様式であるように思われる」といっている。

オットーによれば、聖なるものの経験は、二つの相反する感情を私たちの心に呼び起こす。それは畏怖と魅惑だ。すべて超越的な存在（それは神に限らず、幽霊や怪物でもかまわない）は、私たちを畏怖で満たすと同時に魅了する。圧倒的な非人間性を前にして感じる畏怖を、オットーは「被造物感」とも表現している。これはつまり、「一切の被造物に優越するものに直面して、自己自身が無であることへと沈み消えていく」感覚だ。人間は精神と肉体でできている。精神はときに聖なるもの、非人間的なものを激しく渇望することがあるが、渇望の対象と一体化することはできない。結局、人間は人間だからだ。人間は生きているかぎり、とうとう人間という殻をやぶることはできない。そう自覚するとき、人はおのれの無力さ、卑小さを痛感することになる。それこそオットーがいう「ヌミノーゼ」の経験の本質だ。

一方、人間としての限界や卑小さに気づくことなく、[N] のままに人間の領分を超えようとするとき、塔の高さはたちまち死による贖いを要求する刑罰具となる。20 世紀に入ってゴシック映画が量産されたとき、塔は重要な舞台装置としてしばしば登場し、そこからの転落は悪人の最期を飾るにふさわしいシーンとしてくり返し描かれてきた。すぐ頭に思い浮かぶのは、たとえばティム・バートン監督による『バットマン』（1989）だ。舞台のゴッサム・シティそれ自体がゴシック風の形態を備え、バットマン（マイケル・キートン）とジョーカー（ジャック・ニコルソン）が対決する最終場面は、ゴシック教会の鐘楼である。ジョーカーがバットマンの恋人ビッキーを連れて教会に逃げこみ、バットマンがそれを追う。鐘楼での激しい格闘の末、バットマンはジョーカーを地上へ突き落とそうするが、逆にジョーカーに突き落とされてしま

う。Pすんでのところで外壁にしがみついて一命を取りとめたバットマンは、仲間のヘリで逃げようとするジョーカーの足めがけてバットラング（飛び道具）を放ち、ジョーカーをヘリから突き落とす。そしてジョーカーははるか地上へと落下して絶命するのである。Qこのシーンのゴシック的シンボリズムは見誤りようがない。高名な修道院長のアンブロシオが背徳に溺れて堕落し、ついには悪魔によって空から岩山に突き落とされて死ぬマシュー・グレゴリー・ルイス『マンク』以来、転落死はゴシック的悪人の最期としてステレオタイプ化しているのだ。

やや横道にそれるが、『バットマン』のラストシーンがアルフレッド・ヒッチコック監督『めまい』（1958）の引用であることはよく知られている。『めまい』がゴシックと呼ばれることは少ないが、よくよく細部を検討すると、多くのゴシック的細部を備えた作品であることがわかる。先祖の霊にとり憑（つ）かれた女、死んだ女の面影を探し求める男、そして二度くり返される、教会の鐘楼からの女の転落。特にラストシーン、キム・ノヴァク演じるマデリンが鐘楼から落ちて死ぬ場面は印象的だ。鐘楼に姿を現した影に彼女はおびえ、思わず塔から足を踏み外してしまう。影の正体は修道女で、彼女はマデリンの転落を見ると十字を切り、「神のご慈悲を」とつぶやいて鐘を鳴らす。そこで映画は幕となる。マデリンが実際に何に怯（おび）えたのか、なぜ彼女は塔から落ちたのか、明確な答えはない。が、Rゴシック・ロマンスの文法からすれば、罪を犯した人間にこれ以上ふさわしい神の罰はない。修道女の「神のご慈悲を」というセリフも、彼女が［　S　］。唐突ながらも妙に納得できるこのラストシーンは、ゴシックというジャンルが要求する必然的なエピローグといえるだろう。同様の幕切れはエドガー・アラン・ポー「ウィリアム・ウィルソン」を映像化したルイ・マル監督『影を殺した男』（1967）にも見出せる。主人公ウィルソン（アラン・ドロン）が教会の塔から落下するシークエンスを物語の最初と最後におくことで、この物語のゴシック的雰囲気は完璧なものに仕上がっている。

こうした例は枚挙にいとまがない。塔とそこからの転落はゴシックが好むイメージであり、無数のゴシック物語で描かれ、消費されてきた。ゴシックの愛好家でなくとも、塔からの罪人の転落の情景を既視感を覚えずに思い出すことは難しい。それほど人口に膾炙（かいしゃ）したイメージであり、私たちは誰もがそれとしらずゴシック精神に親しんでいる。

（注）

(1) バラ窓　ステンドグラスで作られた丸い窓。バラの花をかたどった窓。

（唐戸信嘉『ゴシックの解剖：暗黒の美学』、青土社，2020 より。原文の一部を改変している。）

問１　文中の下線部Ａ「シュウ」を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　シュウブンを流す
b　シュウサンを繰り返す
c　シュウビを開く
d　インシュウにとらわれる
e　ホウシュウを受け取る

問２　文中の下線部Ｂの「辛辣」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢からを選び、記号で答えなさい。

a　刺激的なさま
b　手厳しいさま
c　無駄のないさま
d　寛容なさま
e　念入りなさま

問３　文中の下線部Ｃの「皮肉」の対義語はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　肝要
b　世辞
c　諷刺
d　顕示
e　裏面

問４　文中の空欄［　D　］に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　発明の傍証
b　野蛮の帰結
c　誤解の発端
d　様式の影響
e　歴史の惨状

問５　文中の下線部Ｅ「迷惑といえば迷惑な話だ」が指し示す内容として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　ゴシック建築が野蛮なものとされるのはひどい話である
b　ゴート人にとって不名誉な意味づけをされてしまい不快なことである
c　ヴァザーリがゴシックの名付け親とされるのは、不名誉なことである
d　ゴシックという言葉の本来の意味が誤って伝えられるのは、不本意である
e　ゴート人が北方民族を代表するようにみられるのは困ったことである

問６　文中の空欄［Ｆ－１］と［Ｆ－２］に入る語句の組み合わせとして正しいものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　Ｆ－１　過剰　　Ｆ－２　壮麗
b　Ｆ－１　単純　　Ｆ－２　空虚
c　Ｆ－１　平明　　Ｆ－２　甚大
d　Ｆ－１　新鮮　　Ｆ－２　鮮明
e　Ｆ－１　高価　　Ｆ－２　自然

問７　文中の下線部Ｇ「たまもの」が意味するものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　祖先から譲り受けた性質
b　自然から恵まれた恩恵
c　無想によって満たすことができた願望
d　交易によって得られた財産
e　結果として得られた成果

問８　文中の下線部Ｈ「ひときわ」の同義語として**適切でないもの**はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　殊更
b　一入
c　格別
d　就中
e　堅実

問９　文中の下線部Ｊ「作り手の「謙虚さ」を見た」とあるが、その説明として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　人間の持つ技術の不完全さと労働することのよろこびとの矛盾
b　理想を求めて止まない気持ちとその貫徹が不可能なことへのあきらめ
c　神へのひたすらな奉仕を積極的に肯定することへの拒否感
d　自らの理想の代償としてささやかな幸福を得ることへの満足感
e　神が人間には何の得にもならない無駄な労働を強いることへの理解

問10　文中の空欄［Ｋ］に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　垂直志向
b　安定志向
c　世俗志向
d　独立志向
e　未来志向

問11　文中の下線部Ｌ「体現している」の言い換えとして**適切でない語句**はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　具現している
b　表象している
c　象徴している
d　顕現している
e　かたどっている

問12　下線部Ｍ「宗教学者ルドルフ・オットーが『聖なるもの』で「ヌミノーゼ」と呼んだもの」とあるが、オットーが言う「ヌミノーゼ」の説明として**適切でないもの**はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　人間存在がちっぽけであることを感じさせるもの
b　聖なるものとの合一を成し遂げるもの
c　圧倒的な存在を目の当たりにして感じるもの
d　相反する二つの感情を感じさせるもの
e　人間が限界を持つ存在であることを感じさせるもの

問13　文中の空欄［　N　］に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　憧れや渇望
b　超越と崇高
c　軽視と余裕
d　精神と肉体
e　感性と自覚

問14　文中の下線部P「すんでのところで」と類似の意味を持つ語句として**不適切なもの**はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　危機一髪のところで
b　あと一歩のところで
c　とば口のところで
d　あわやのところで
e　紙一重のところで

問15　文中の下線部Q「このシーンのゴシック的シンボリズムは見誤りようがない。」とあるが、「このシーンのゴシック的シンボリズム」の説明として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　地上への落下が敗者を決定づける
b　結末の逆転劇が正義の存在を示す
c　飛び道具が神の意思を暗示する
d　高さが罪をつぐなう刑罰の道具となる
e　逃走が悪の性質を明確にする

問16　文中の下線部R「ゴシック・ロマンスの文法」とあるが、ここで「文法」が意味するものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　小説の言葉遣いの工夫
b　小説の展開のきまりごと
c　小説の書き手の思考
d　小説の文章の最小単位
e　小説の主人公の性格の描き方

問17　空欄［　S　］に入る最も適切な語句はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

a　神の救いを願いながら死んだことを暗示している
b　神に祝福されて死んだことを暗示している
c　神に導かれて死んだことを暗示している
d　神の罰を受けて死んだことを暗示している
e　神を求めようとして死んだことを暗示している

問18　ゴシック建築とカトリック信仰との関係を筆者はどのように考えているのか。句読点を含めて50字以内で書きなさい。解答は、解答用紙の記述問題解答記入欄に書きなさい。